大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

<原著>"play"と共起するスポーツの意味的制限(人文社会科学系)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平井, 美津子, 久部, 幸次郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010822

大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要，Vol. 8, p.57-64, 2002
Bulletin of Osaka Prefecture College of Health Sciences

原　著

“play”と共起するスポーツの意味的制限

平井美津子[1),*)]，久部幸次郎[2),**)]

([1)]大阪府立看護大学医療技術短期大学部，[2)]関西学院大学文学部)

Semantic Restrictions of Nouns Expressing Sports Occurring with “Play”

Mitsuko Hirai and Kohjiro Hisabe

([1)]Osaka Prefecture College of Health Sciences and [2)]School of Humanities, Kwansei Gakuin University)

The verb “play” can take nouns expressing various kinds of sport as its object: play tennis, play baseball, etc. But not all can occur with “play”: *play boxing, *play camping. (*shows an ungrammatical sentence.)

In this paper, first we studied the semantic change of “play” diachronically. Next we divided various kinds of sport into two groups and analyzed them: one is a group of nouns expressing sports which can occur with “play”, the other is a group of those which cannot. As a result, we found that almost all kinds of sport occurring with “play” had six features; while meeting the six features, the noun expressing the sport could occur in the object position of “play”. Therefore we suggest that the six features are the semantic restrictions of nouns expressing sports occurring with “play”. Also we add that in the case of having a shortage of two features and over, the noun expressing the sport could not occur with “play”.

Key words: play; plegan; player; semantic restriction; six features

1. はじめに

英語の動詞“play”が野球やテニスなどのさまざまな種目のスポーツを表す名詞を目的語としてとり，これらのスポーツを「する」という意味をもっていることはよく知られている[(1 1)]。しかし“play”がすべてのスポーツの種目を目的語としてとることはできない。

(1) a. I <u>played</u> baseball yesterday.
　　b. *I <u>played</u> boxing.
　　c. *Mary will <u>play</u> camping.

例えば (1) の例文においてaが文法的であるのに対し，b, cの文は非文法的である (*は非文法的であることを示す)。

ところでスポーツにはさまざまな種目がある。野球やサッカーのようにチーム対チーム，柔道や剣道のように個人対個人で勝敗を争うスポーツ，水泳やスケートのような個人競技，キャンプや魚釣りのように主に勝敗を争わないレクリエーション性の高いスポーツなどである。

日本語ではスポーツ名の後に「～をする」を続けることにより，スポーツの種目に関わらずそのスポーツを「する」という行為を表すことが可能で，そこには意味的制限はない。しかし (1) のb，cが示しているように，日本語のスポーツを「する」に相当する英語の“play”には後続する名詞に意味的制限が認められる[(1 2)]。

現代の言語学においては，一般に他動詞と目的語の名詞句が共起しうるかどうかは，動詞が後続する名詞句に対して意味的制限をもっていると仮定されている。そこで本稿ではまず通時的に“play”を分析し，この単語がどのような意味的変化を遂げてきたのかを探り，そこから議論を進めて“play”が目的語に対してもっている意味的制限を考察する。

*) 本学非常勤講師
**) 関西学院大学文学部非常勤講師

(受付日 2002年8月12日，受理日 2002年10月30日)

(1 1) 動詞の“play”には様々な意味があるが，本稿ではスポーツに関する意味のみに限定して考察した。
(1 2) この分析とは逆に“play”は目的語の名詞に対して意味的な制限をもたず，目的語の名詞の方が何らかの意味的な制限をもっている可能性もある。

2. “play”の通時的分析

まず初めに通時的分析をすることにより“play”の本質的な意味を探る。

“play”は古英語から存在し，当時は“plegan”という語であった。

(2) We læraþ ðæt preost ne beo hunt
We teach that a priest neither is a huntsman
ne hafecere ne tæflere ac plege on
nor a hawker nor a gambler, because plays on
his bocum. (Simpson, 1989)
his books.
(We teach that a priest is neither a huntsman nor a hawker nor a gambler, because he plays on his books.)[(1)]

(2) は960年頃の例文である。この文における“plegan”は現代英語における“occupy oneself”を意味している。すなわち (2) の例文を現代英語に訳すると次のようになると考えられる。

(3) We teach that a priest is neither a huntsman nor a hawker nor a gambler, because he occupies himself in his books.

次に中英語における“play”をみてみる。

(4) Iesus went him for to plai with childir on an
Jesus turns him further to play with children on a
halidai. (Simpson, 1989)
holiday.
(Jesus turns himself further to play with children on a holiday.)

(4) は1300年頃の例文である。この文において“play”は“exercise oneself in the way of diversion or amusement”，すなわち「楽しみながら動く」という意味を表し「遊ぶ」という意味を含むようになった。また同じ時期に次のような例文も存在する。

(5) Þe wreaðfule bivore þe feond skirmeð mid
Then a wrathful man before the devil tosses with
cnives ant is his cnif-warpere, ant pleieð mid
a knife and is his knife-thrower, and plays with
sweordes,... (Burrow, 1996)
a sword,...
(Then a wrathful man tosses before the devil with a knife and is his knife-thrower, and plays with a sword,...)

(5) の例文は，剣を使って「戦う」という意味である。実際にこの時代には“swordplay”（剣術）という言葉が存在する。

さらに近代英語に入ると次の (6) と (7) のような例文がみられる。

(6) The Dolphyn... sent to hym a tunne of tennis
The Dolphin... sends to him a barrel of tennis
balles to plaie with. (Simpson, 1989)
balls to play with
(The Dolphin...sends a barrel of tennis balls to him to play with.)

(7) He taught young ladies to play billiards on a wet day. (Simpson, 1989)

(6) は1548年のものである。この文で“play”は「ボールを使って遊ぶ」という意味を表していることから“play”が「ボール」と何らかの関係があることを示唆している。また (7) の例文は1866年のものであるが，“billiards”が表れていることから「ボール」の存在を裏付けるものであるといえよう。

さてここまでで整理すると，“play”は「遊び」の要素を含んだ中での「戦う」という意味をもち，「ボール」と何らかの関係があることがわかる。この意味は現代英語においてもそのまま受け継がれていると考えられる。また *The Oxford English Dictionary* (以下 *OED*) では特に“a definite form of amusement”として“game”を捉えていることから“play”は“game”つまり「試合をする・戦う」という意味をもっているといえる。以下これらのことをふまえて議論を進めていく。

3. “play”と共起可能なスポーツ

“play”と共起可能なスポーツの種目にはどのようなものがあるのかをみてみる。ここでは“play”とスポーツの種目との関係を示すために，スポーツの種目名とその「スポーツをする人」の呼び方，そしてそのスポーツを「する」，つまりそのスポーツの動詞形を紹介する。表1は“play”と共起可能なスポーツ，表2は共起不可能なスポーツである。

(1) 例文(2)，(4)，(5)，(6)の現代語訳は，筆者の1人である平井がつけたもので，できる限り原文に忠実に訳したものである。

表 1　"play" と共起可能なスポーツの種目[注4]

スポーツ名	スポーツする人	動詞形
badminton	player	play badminton
billiards	player	play billiards
bowling	player/bowler	play bowls/bowl
baseball	player	play baseball
basketball	player	play basketball
cricket	player/cricketer	play cricket/cricket
croquet	player	play croquet
curling	player/curler	play curling/curl
football[注5]	player/footballer	play football
golf	player/golfer	play golf/golf
handball	player	play handball
hockey	player	play hockey
lacrosse	player	play lacrosse
netball	player	play netball
ping-pong/table tennis	player	play ping-pong play table tennis
polo	player	play polo
rugby (football)	player	play rugby
soccer	player	play soccer
softball	player	play softball
squash	player	play squash
tennis	player	play tennis
volleyball	player	play volleyball

表 2　"play" と共起不可能なスポーツの種目

スポーツ名	スポーツする人	動詞形
archery	archer	—
bobsled	bobsledder	bobsled
boxing	boxer	box
camp/camping	camper	camp
canoe	canoeist	canoe
dive/diving	diver	dive
fencing	fencer	fence
fishing	fisher(man)	fish
gymnastics	gymnast	—
hunting	hunter	hunt
judo	judoist	—
kayak	kayaker	kayak
karate	karateka[注6]	karate
kendo	kendoist	—
luge	luger	luge
mountaineering/ mountain climbing	mountaineer	mountaineer/ climb a mountain
rock-climbing	rock-climber	rock-climb
row	rower	row
shooting	shooter	shoot
skating	skater	skate
skateboarding	skateboarder	skateboard
skiing	skier	ski
snowboarding	snowboarder	snowboard
surfing	surfer	surf
swimming	swimmer	swim
taekwondo	taekwondoist	—
trampoline	trampoliner, trampolinist	—
weightlifting	weightlifter	—
windsurfing	windsurfer	windsurf
wrestling	wrestler	wrestle

(注4) ここでは一般に普及しているスポーツを網羅したが，すべての種目をとりあげたわけではない。本稿ではここで紹介しているものについての言及にとどめた。

(注5) "football" は，19世紀イギリスでルールが統一される過程で "soccer" と "rugby" に分裂した。またアメリカでは "football" は "American football" のことを指す。

(注6) "karateka" は日本借用語で「空手家」から導入されたものである。
(e.g. The other guy was making like a karateka. (Simpson, 1989))

表1に属するものの動詞形について，“cricket”のように“play”を伴って用いられるものと“cricket”という動詞の2種類から成るものがある。また「スポーツをする人」も動詞形の場合と同様，接尾辞“-er”から作られたものと“player”の2種類から成るものがある。一般に動詞形として“play”を伴うものは，その「スポーツをする人」を“player”と呼ぶことができる。ちなみに“baseball”をする人について次のような事実がある。

(8) He...at once became a London baseballer. (Simpson, 1989)

この文における“baseballer”という語は過去に存在はしたものの，*OED*によれば，1896年以降この単語が使われた形跡がみられない。語形成の観点からいえば，本来動詞形が存在しない“baseball”をあえて動詞に転換させ，動詞に添加することにより人を表す名詞をつくる“-er”という接尾辞をこの語に添加して“baseballer”を作るこの派生は，現代英語においては不可能になったのではないかと推測することができる。また“baseball”が以下でみるように“play”の意味的制限をクリアしているスポーツであるために，自然に“player”に取って代わられたと考えることも可能であろう。

一方，表2に属するものの動詞形は一部不明なものもあるが原則として“play”を伴なわず，従って「スポーツをする人」も“player”とはいわない。ここでは主に接尾辞“-er”を使って「スポーツをする人」を表している。

以下，これらのデータを元にして“play”が目的語としてとることができるスポーツの種目の意味的制限を考察する。

4. スポーツの分類と“play”の意味的制限

ここでは前述した事実をふまえ，それぞれの種目をその特徴に応じて分類し，“play”が目的語に対してどのような意味的制限をもっているのかを考察する。

まず表1から“play”と共起可能なスポーツの種目を取り出し以下に示す。

(9) “play”と共起可能なスポーツの種目
badminton, billiards, bowling, baseball, basketball, cricket, croquet, curling, football, golf, handball, hockey, lacrosse, netball, ping-pong/table tennis, polo, rugby (football), soccer, softball, squash, tennis, volleyball

これらには(10)に示すような共通点がみられる。

(10) “play”と共起可能なスポーツの特徴
① (対戦) 相手が存在する。
② 試合形式をとる。
③ 試合が区分されている (イニング，セット，ラウンドなど)。
④ 決められた人工的な枠内で競技をする。
⑤ 試合のアイテムとしてボールが存在する。
⑥ 競技をする時にチームを形成し協調性を重視する。

①の「相手」とは，相手がとる行動に対しこちらが反応したり，直接相手と戦うなど試合を共に行いながら勝負をする相手も含まれる。さらに試合は「ボール」，時にボール以外のもの，例えばバドミントンの場合シャトルコックを介することもある。

ところで①～⑤までの特徴は一部の例外を除き[17]，(9)で示したスポーツの種目に共通するものである。これらはすべて，相手が打ったり投げたり蹴ったりするものをこちらも打ったり投げたり蹴ったりして行われるものであり対戦「相手」が存在する。そして試合が「区分」され，決められた「人工的な枠内」で行われることはいうまでもない。また⑥の特徴であるが，1対1の試合をするものやダブルスを組んで2対2で対戦するものもあるが，原則的にチームを形成し，チーム内では「協調性」が重視されることからこの特徴をあげることにした。

さて，このように考えていくと“play”の目的語の位置に表れることができるスポーツの種目は，(10)にあげた①～⑥の特徴をもち“play”の目的語に対する意味的制限であるといえる。

ところで上の事実を支持する例文(11)～(15)をみてみる。

(11) Sanath Jayasuriya,...who last year played an extraordinary Test innings against India. (Ghosh, 1998)
(12) England are playing France at football tomorrow. (Summers, 1993)
(13) Charles Dawson, who has just been playing John

[17] “bowling”や“golf”はその他の“play”と共起可能なスポーツと違って変則的な形態をとるが，球技として欧米で普及したものである。(22)でも少し指摘を加えたが，さらなる検討も必要であろう。

Roberts for the Championship [in the billiards]. (Simpson, 1989)

(14) In soccer, only the goal-keeper may play the ball with his hands. (Crowther, 1995)

(15) I've never played centre-forward before. (Crowther, 1995)

これらの文は“play”と上で述べた6つの特徴が関連していることを示している。まず(11)は「イニング」そのものが“play”の目的語になっている興味深い例文である。また(12)と(13)は対戦「相手」あるいは「チーム」が存在する。(12)～(14)の例文中のスポーツはすべて「ボール」を使うものである。さらに(15)は選手が特定のポジションにつき，決められた「人工的な枠内」で動くということを表している。

前述したように“play”は「試合をする・戦う」という意味をもち，なおかつ「ボール」と何らかの関係がある。このことは共起することができるスポーツの種目も「戦い」や「ボール」と関連しているものでなければならないという意味的制限につながるものと考えられる。従って①～⑥の特徴をもつ種目が“play”の目的語の位置に現れうることから，“play”と共起するスポーツの意味的制限とした①～⑥は妥当であるといえよう。

さて次は“play”に①～⑥の意味的制限があることを裏付けるために“play”と共起不可能な種目について考察する。次の種目は，表2に示した“play”と共起不可能なスポーツの種目を取り出したものである。

(16) “play”と共起不可能なスポーツの種目
archery, bobsled, boxing, camp/camping, canoe, dive/diving, fencing, fishing, gymnastics, hunting, judo, kayak, karate, kendo, luge, mountaineering/mountain climbing, rock-climbing, row, shooting, skating, skateboarding, skiing, snowboarding, surfing, swimming, taekwondo, trampoline, weightlifting, windsurfing, wrestling

(16)に示した種目の中でも次のものは上の①～⑥の特徴を全くもっていない。

(17) camp/camping, dive/diving, fishing, hunting, mountaineering/mountain climbing, rock-climbing, surfing, windsurfing

ここにあげたものはすべて自然の中で行われ，「試合」というよりむしろ「遊び」の要素が強いので“play”とは共起しないと考えられる。さらにもう1つの共起不可能な種目を(18)に示す。

(18) archery, gymnastics, shooting, skating, skateboarding, skiing, snowboarding, swimming, trampoline, weightlifting

これらの種目には「相手」は存在するが，直接相手と戦うわけではないので，①の特徴をもたないといえる。そしてすべての選手が別々あるいは何人かずつに分かれて試合を行い，その後順位により結果がでるという「個人性」が強い種目であるので，⑥を満たさない。一方，“skating”や“swimming”にはリレーが存在し，この場合チームを作ることになるが，(9)にあげた種目ほどチーム内の選手同士にチームプレーという意識は少なく，実質的には個人成績の総合力を競うという点では⑥の性格は低いといえることから⑥を満たさないと考える。また試合ではボールを介さないが，タイムや力あるいは技術点を競うことから②の特徴をもつことになる。さらに決められた「人工的な枠内」で行われるので④の特徴をもっている。つまり①，③，⑤，⑥の特徴をもっていないので“play”とは共起することができないと考えられる。なお(18)に属する種目のうち“skating”，“skateboarding”，“skiing”，“snowboarding”は(17)にも属する可能性があることを指摘しておく。

次に(19)の種目である。

(19) bobsled, canoe, kayak, luge, row

これらは「試合形式」であり，決められた「人工的な枠内」で行われ，「チーム」を作って団体戦を行う場合があるので，②，④，⑥を満たしている。もちろんこの団体戦にはチームプレーが必要不可欠である。しかし対戦「相手」は存在するが，直接対戦するわけではない。またイニングは存在せず，ボールも介さないので①，③，⑤の特徴をもたない。従って“play”と共起することができないと考えられる。

残りは(20)の種目である。

(20) boxing, fencing, judo, karate, kendo, taekwondo, wrestling

これらの種目は決められた「人工的な枠内」で競技す

表 3 (16) の条件区分表

スポーツ名	①	②	③	④	⑤	⑥
boxing	○	○	○	○		
fencing	○	○		○		
judo	○	○		○		
karate	○	○		○		
kendo	○	○		○		
taekwondo	○	○		○		
wrestling	○	○		○		
bobsled		○		○		○
canoe		○		○		○
kayak		○		○		○
luge		○		○		○
row		○		○		○
archery		○		○		
gymnastics		○		○		
shooting		○		○		
skating		○		○		
skateboarding		○		○		
skiing		○		○		
snowboarding		○		○		
swimming		○		○		
trampoline		○		○		
weightlifting		○		○		
camping						
diving						
fishing						
hunting						
mountaineering						
rock-climbing						
surfing						
windsurfing						

るので④を満たしている。さらに「試合形式」をとり，すべて直接対戦する「相手」が存在するので①，②を満たしている。試合は決められた時間内で行われ区分されていない (ただし“boxing”は3分を1ラウンドとしてこれを12ラウンド行うので広い意味でイニングといえる)。しかしこれらの種目はすべてボールを介さないので⑤を満たさない。またこれらは団体戦を行うことがあるが，前述したように個人成績を総合して順位を決めることから⑥の性格は極めて低いと思われる。すなわち“boxing”は⑤，⑥の特徴を，これ以外は③，⑤，⑥の特徴を満たさないことになる。従って“play”と共起することができないと考えられる。

以上の考察が，(16) にあげたスポーツが“play”と共起しない理由である。ちなみに表3は表2の種目の特徴を条件別に区分してグループ化したものである。

ところでこれらのことをふまえて次のようなこともいえる。

(21) 上述した①～⑥の特徴のうち，2つ以上の特徴が欠けている時，その種目は“play”と共起することができない。

ここまで“play”の目的語の位置に現れるスポーツの種目に対してどのような意味的制限があるかについて考察してきたが，“play”と共起可能なものの中にも少し問題点があるので，最後に少し議論する。

5. 表1の問題点

以下は「スポーツをする人」の呼び方が2種類あるもの，あるいは動詞形が2種類あるものを表1から取り出したものである。

(22)	bowling	player/bowler	play bowls/bowl
	cricket	player/cricketer	play cricket/cricket
	curling	player/curler	play curling/curl
	football	player/ footballer	play football
	golf	player/golfer	play golf/golf

まず“bowling”と“golf”についてであるが，「試合形式」をとり，試合が「区分」されており，決められた「人工的な枠内」で行われ，「ボール」を介するので②～⑤までの特徴をもっている。しかし点数を競うものの，

直接対戦する相手ではなく，「個人性」が強い種目で①，⑥を満たすとは限らない。従って2種類の呼び名と2種類の動詞形が存在するのではないかと思われる。

次に“cricket”と“football”についてである。両者は“baseball”とほぼ同じ特徴をもつが，“baseball”と違って“cricket”は2種類の呼び名と2種類の動詞形，“football”は2種類の呼び名が存在する。前述したように，過去に存在した“baseballer”という語は現在では用いられていないが，下の例文に示すように“cricketer”，“footballer”は現在も存在し続けている。

(23) a. Why would you go to watch an English cricketer at a moment? (Ghosh, 1998)
b. Brazil is a nation that has produced the best footballers in the world... (Elliot, 1998)

a，bの例文共に“cricketer”を“cricket player”に，“footballer”を“football player”に置き換えることは可能であろう。しかし両者に何らかの意味的相違が存在すると考えられるが，これ以上はここでは言及しない。なお“cricket”の動詞形が今も存在するという点であるが，*OED*によれば“cricket”の名詞形は1598年，動詞形は1800年頃に初出している。しかし現在では下の(24)に示すように，

(24) One is trying to play cricket, the other is not. (Haigh, 1998)

“cricket”は「個人性」よりむしろ「協調性」を重視するスポーツであることから“play cricket”が一般的になってきたのではないかと考えられる。名詞“cricket”から動詞形が現れたという点については語源的な考察も必要で，これは今後の課題となろう。

“curling”はスコットランド起源の「遊び」から競技に発展したもので，「試合形式」をとり1チーム4人で行い，試合が「区分」されている。そして決められた「人工的な枠内」で行われる。さらにカーリングストーンを介して対戦するため，これが「ボール」の代わりになる。直接対戦するとはいえないが，競う「相手」がいて，相手の個々の結果を見て次の作戦を立てるということを考慮に入れると①～⑥の特徴をもつことになるので“play”と共起可能である。しかし(17)で示した種目と同様「遊び」の要素が強く，本来「カーリングをする」は動詞形“curl”で表されるものである。現在ではオリンピック競技にもなり，インターネット上で“play curling”という例文が検索されることから，この種目は今後“play curling”で普及するものと考えられる。

6. おわりに

本稿では“play”が目的語にスポーツを表す名詞をとる時，どのような意味的制限があるのかについて考察してきた。その結果“play”と共起することが可能なスポーツの種目には6つの特徴があり，その特徴をもつ種目が“play”の目的語の位置に現れることができることから，“play”の意味的制限はこの6つであることがわかる。さらに，これらの特徴のうち2つ以上が欠けていれば“play”と共起することができないということも付け加えておく。

今回“play”を通時的に分析し，そこから議論を進めて“play”と共起可能なスポーツの特徴をみいだした。しかしそれぞれのスポーツにはそれぞれの歴史があり，古代から存在するものや近代スポーツとして発展してきたものもある。こういったスポーツの起源や歴史的な観点から“play”と共起するスポーツを考察することは違った切り口として興味深いものである。このことについては今後の研究課題となろう。

参考文献

荒木一雄，近藤健二，藤原保明 (1993) “古英語の初歩”，英潮社，東京，p.30-39, 51-61.

荒木一雄，水鳥喜喬，米倉　綽 (1997) “中英語の初歩”，英潮社，東京，p.42-48.

Burrow, J.A. and Turville-Petre, J. (1996) “A Book of Middle English”, Blackwell, Oxford, p.109, 323-373.

Crowther, J., Kavanagh, K. and Ashby, M. (1995) “Oxford Advanced Learner's Dictionary”, 5th ed., Oxford University Press, Oxford, p.884.

Elliott, M. (1998) “Cup Fever”, NEWSWEEK, June 8, p.48.

Ghosh, A. (1998) “Cricket in No Man's Land”, TIME, Nov. 23, p.53.

Haigh, G. (1998) “A Most Peculiar Grail”, TIME, Nov. 23, p.48-49.

Hall, J.R.C. (1993) “A Concise Anglo-Saxon Dictionary”, Cambridge University Press, Cambridge, p.1-432.

河上誓作 (1996)「言語使用の創造的側面」と言語理論．言語，No.4: 52-59.

河上誓作 (1997) "認知言語学の基礎", 研究社, 東京, p.27-39.

Mitchell, B. and Robinson, F.C. (1995) "A Guide to Old English", Blackwell, Oxford, p.301-365.

Quirk, R., et al. (1980) "A grammar of contemporary English", Longman, Essex: 998-999.

Simpson, J.A. and Weiner, E.S.C. (1989) "The Oxford English Dictionary", 2nd ed., Vol. I, Clarendon Press, Oxford, p.979.

Simpson, J.A. and Weiner, E.S.C. (1989) "The Oxford English Dictionary", 2nd ed., Vol. IV, Clarendon Press, Oxford, p.18-19.

Simpson, J.A. and Weiner, E.S.C. (1989) "The Oxford English Dictionary", 2nd ed., Vol. VIII, Clarendon Press, Oxford, p.352.

Simpson, J.A. and Weiner, E.S.C. (1989) "The Oxford English Dictionary", 2nd ed., Vol. XI, Clarendon Press, Oxford, p.35, p.1015-1022.

寒川恒夫, 稲垣正浩, 谷釜了正, 野々宮徹 (1991) "図説スポーツ史", 朝倉書店, 東京, p.58-149.

Summers, D.S. and Stock, P. (1993) "Longman Dictionary of English Language and Culture", Longman, Essex, p.1007.

坪井栄治郎 (1998) 認知言語学と日本語研究. 言語, No.11: 56-63.

辻　幸夫 (1991) カテゴリー化の能力と言語. 言語, No.10: 46-53.

上野景福 (1955) "英文法シリーズ　語形成", 研究社, 東京, p.61-72.